

# 日本と韓国の看護大学生の生と死に対する意識の比較

道廣睦子\* 岡須美恵\* 橋本和子\*\* 安東勝弘\* 安福真弓\* 名越恵美\*

\*吉備国際大学保健科学部看護学科 〒716-8508 岡山県高梁市伊賀町8

\*\*高知大学医学部看護学科 〒783-8505 高知市南国市岡豊町小蓮

## Comparison of awareness of life/death between nursing college students in Japan and Korea

Mutsuko MICHIIHIRO · Sumie OKA · Kazuko HASHIMOTO,  
Katsuhiko ANDO · Mayumi YASUFUKU · Megumi nagoshi

Department of Nursing, School of Health Science, KIBI International University

8,Iga-machi,Takahasi-city,Okayama(〒716-8508)Japan

Division of Basic Nursing , Department of Nursing

Kochi University Kohasu Oko, Nangoku City, Kochi(783-0043),Japan

### Abstract

The purpose of this study was to clarify the view of life/death in nursing college students in Japan and Korea. A self-described survey was carried out in 251 nursing college students in Japan and 211 in Korea. The following results were obtained.

1. More students in Korea had a desire to die, 40% of them desired so when they were primary/junior high school students.
2. The marked difference in the view of life/death between the students in Japan who generally have no specific religion and those in Korea with strong religious beliefs was that the latter has the view of the next world.
3. The Japanese students considered that death education should be initiated in primary school while the Korean students that its initiation should be in college. This suggests that no death education is given

when Korean students often desire to die.

4. It is important to initiate death education in primary school.

キーワード：看護大学生、日本、韓国、死生観

Key words: nursing college students, Japan, Korea, view of life/death

### はじめに

日本において学童期～青年期にあたる15歳までに85%の学生が死に遭遇し、中学生のころに自殺をしたいと意識したことのある学生が25%と言う結果が報告されている。<sup>1)</sup>

日本・韓国の自殺による死亡率は日本23.3、韓国15.5(人口10万対)であり、増加の傾向にある。特に日本においては若年層の自殺者が後を絶たず、死亡原因別統計によると第1位が事故死、第2位が自殺であり憂慮する事態に陥っている。そこで、若年者の生と死についての意識を、日本と韓国の看護大学生の意識調査により比較を試みた。また、日本と韓国の看護大学生の死と生に対する意識と死の教育についての意識を明らかにすることにより、文化・価値を理解した看護教育および国際化に適応した看護教育を行う資料としたいと考えた。

### 研究方法

1. 研究対象：同意の得られた日本のA・B大学の看護学生264名(回収率88%)と韓国のC・D・E大学の看護学生211名(回収率70.3%)、合計475名。
2. 調査期間：2003年1月～3月。
3. 調査内容：死生についての意識15項目(そのうち、2項目は自由記述法により「あなたの生きがい」「死について」回答を求めた。) , 死に関する教育10項目、臓器移植に関する項目6項目、ホスピスに関する項目5項目であった。
4. データ収集：質問紙は、生命倫理研究会意識調査<sup>2)</sup> に臓器移植6項目を追加した日本語版の質問紙を、韓国に在住する日本人留学生の訳した韓国語版の質問紙を使用した。大学の学科長に了解を得た後、学生に説明し同意の得られた学生より回収した。
5. データ分析：SPSSを用い基礎統計の後 $\chi^2$ 検定を行った。自由記述はKJ法にて分析した。

### 結果

1. 回答者の属性：日本の大学生のうち男子学生13名を削除した女子学生251名。平均年齢20.52歳(SD±1.46)。韓国の大学生(女子学生のみ)211名。平均年齢21.8歳(SD±1.40)。
2. 死の意識：死を意識し考えたことがある学生は韓国では195名(93.3%)、日本では245名(97.6%)であった(表1)。最初、死について考えた時期は日本では205名(82.7%)の人が小中学校の頃と答えたのに対し、韓国では132名(66.2%)が小中学校の頃と答えた( $p < 0.05$ ) (表2)。どんな時死について考えましたかの質問に対し、日本では「肉親・親戚の死」「ふとなんとなく」が多く、韓国では、「人生について考えた時」「ふとなんとなく」が多かった(図1)。死にたいと思ったことがある学生は日本では140名(56.3%)に対し、韓国は159名(77.8%)であった( $p < 0.05$ )。時期は韓国では、小中学生の頃が全体の57.7%を占めていた。日本においては、小学生32名(12.7%)、中学生51名(20.2%)高校生37

(14.7%) 大学生 20 名 (7.9%) であり、小中学生の頃が全体の 32.9%と韓国に比べて少なかった ( $p < 0.05$ ) (表 3)。死にたいと思った時は、日本では「孤独」「成績が悪い時」「いじめられた時」韓国は「寂しさを感じたとき」「なんとなく」「目標を失った時」が多かった (図 2)。自殺についてどう思うかの質問に対して、「人生からの逃避」日本 37.9%、韓国 39.2%、「絶対してはならない」日本 33.5%、韓国、26.8%であった。日本では「時と場合による」と答えた学生が 31.5%にのぼった (図 3)。霊魂を信じるかの質問に対して、日本では 110 (43.8%) 韓国は 143 名 (68.8%) であった (表 4)。特定の宗教を信じますかの問いに対して日本 16 名 (6.4%)、韓国 107 名 (51.4%) であった ( $p < 0.001$ ) (表 5) 死を考えるうえで宗教は大きな役割を持つかの問いに対して、「思う」日本 112 名 (44.6%) 韓国 136 名 (66.0%) であった。(表 6)

表 1 死について意識したり考えたことがありますか n=460

	ある 名 (%)	なし 名 (%)	p 値
韓国	195 (93.3)	14 (6.7)	.028
日本	245 (97.6)	6 (2.4)	

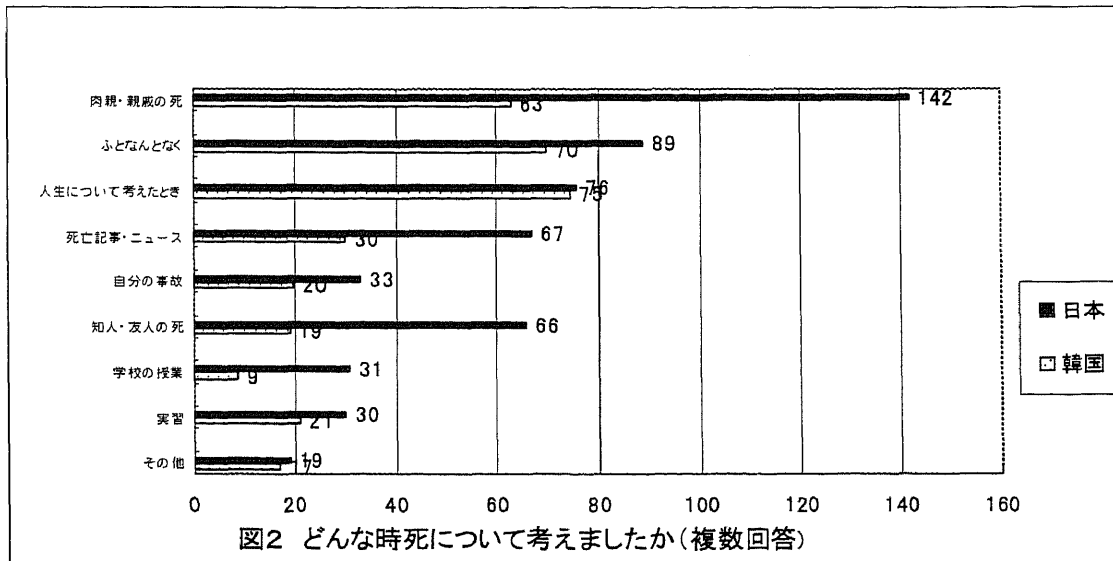


図 2 どんな時死について考えましたか (複数回答)

表 2 最初に死について考えたのは何歳の頃ですか n=447

国名	小学生以前 名 (%)	小学生の頃 名 (%)	中学生の頃 名 (%)	高校生の頃 名 (%)	大学生になって 名 (%)	その他 名 (%)	P 値
韓国	18 (9.0)	56 (28.1)	59 (29.6)	47 (23.6)	19 (9.5)	0	.000
日本	24 (9.7)	122 (49.2)	60 (24.2)	25 (10.1)	14 (5.6)	3 (1.2)	

表 3 死にたいと思ったことがありますか n=459

国名	小学生以前 名 (%)	小学生の頃 名 (%)	中学生の頃 名 (%)	高校生の頃 名 (%)	大学生になって 名 (%)	ない 名 (%)	P 値
韓国	3 (1.4)	21 (10.1)	62 (30.0)	59 (28.5)	16 (7.7)	46 (22.2)	.000
日本	1 (0.4)	31 (12.3)	53 (21.0)	37 (14.7)	20 (7.9)	110 (43.7)	

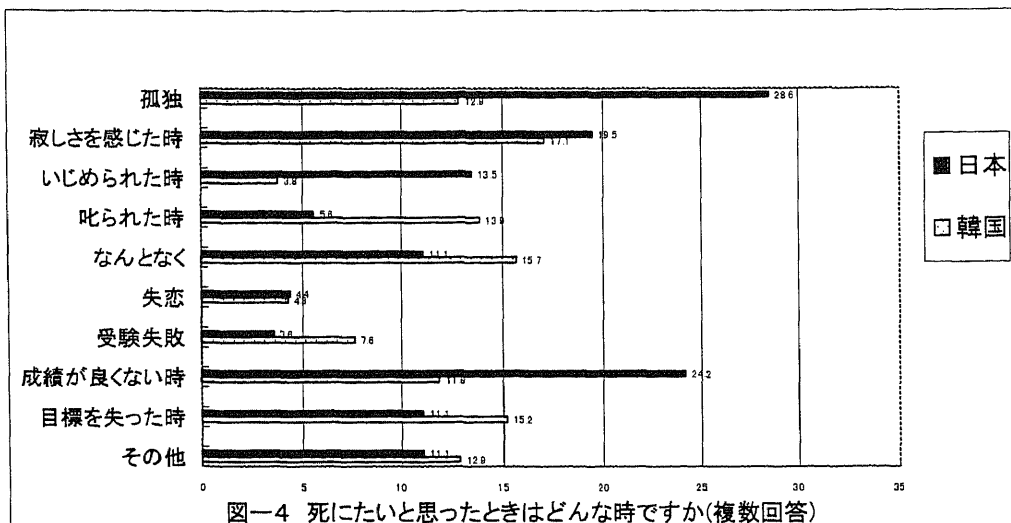


図-4 死にたいと思ったときはどんな時ですか(複数回答)

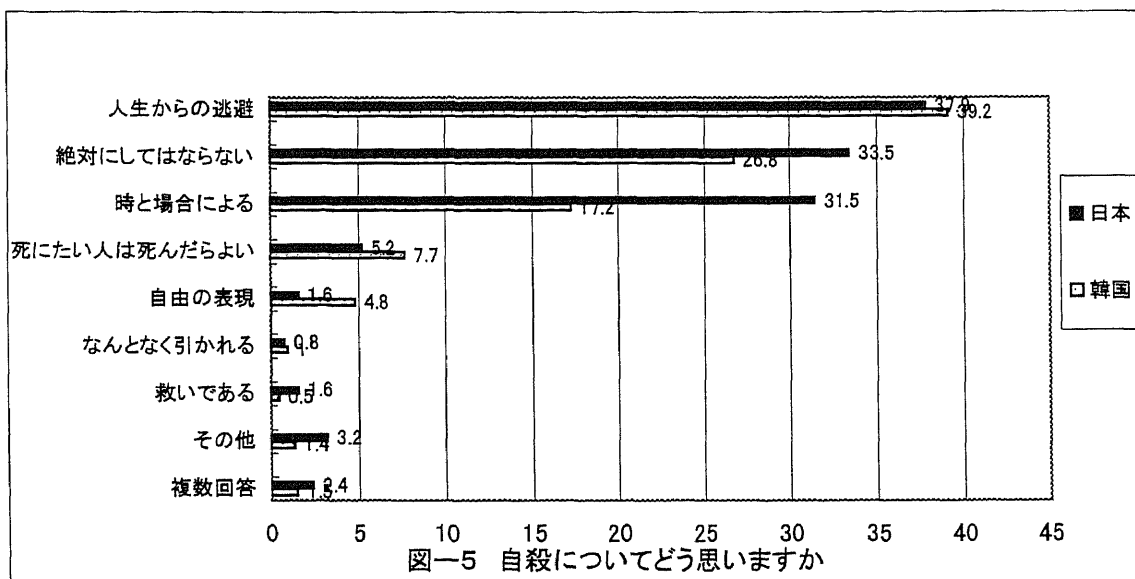


図-5 自殺についてどう思いますか

表4 靈魂の存在を信じますか n=459

	信じる 名 (%)	どちらともいえない 名 (%)	信じない 名 (%)	P 値
韓国	143 (68.8)	51 (24.5)	14 (6.7)	.000
日本	110 (43.8)	115 (45.8)	26 (10.4)	

表5 特定の宗教を信じますか。

	信じてい る	信じない	有意確率
韓国	107 (51.4)	101 (48.6)	0.000
日本	16 (6.4)	234 (93.2)	

表6 死を考えるうえで、宗教は大きな役割を持つか

	思う	どちらとも いえない	思わない	P 値
韓国	136 (66.0)	40 (19.4)	30 (14.6)	0.000
日本	112 (44.6)	87 (34.7)	52 (20.7)	

3. 「生きがい」「死についての思い」について自由記述の結果を図4、図5に示した。

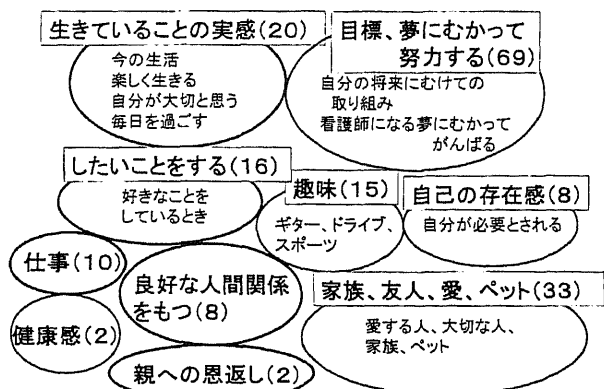


図 4-1 日本の看護学生の「生きがい」(KJ法)

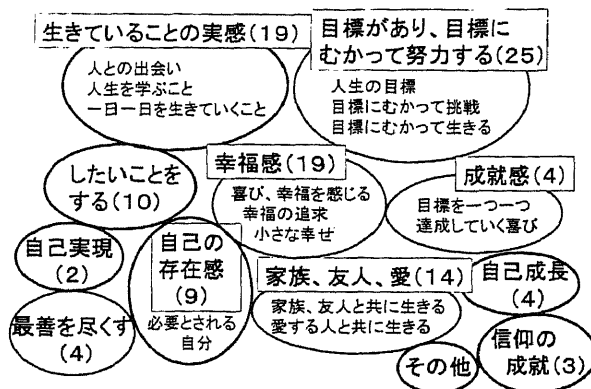


図 4-2 韓国の看護学生の「生きがい」(KJ法)

図4に示したのは「生きがい」とは何かについて日本の看護学生251名中180名の自由記述があった。生きがいとは「目標・夢に向かって努力する」69、「家族・友人・愛・ペット」33、「生きていることの実感」20、「したいことをする」16「趣味」15、「仕事」10、「自己の存在感」8、「良好な人間関係を持つ」8、「健康感」2、「親への恩返し」2などであった。韓国の看護学生211名中137名の自由記述があった。生きがいとは「目標に向かって努力する」25、「生きていることの実感」19、「幸福の追求・幸福感」19、「家族・友人・愛」14、「成就感」4などであった。両国の共通項目は、「目標に向かって努力する」「家族・友人・愛」「生きていることへの実感」「したいことをする」「自己の存在感」であり、異なる項目は日本では、「趣味」「ペット」「良好な人間関係」「健康感」「親への恩返し」が加わり、韓国では「成就感」「自己実現」「信仰の成就」「自己成長」「幸福の追求」が加わった。

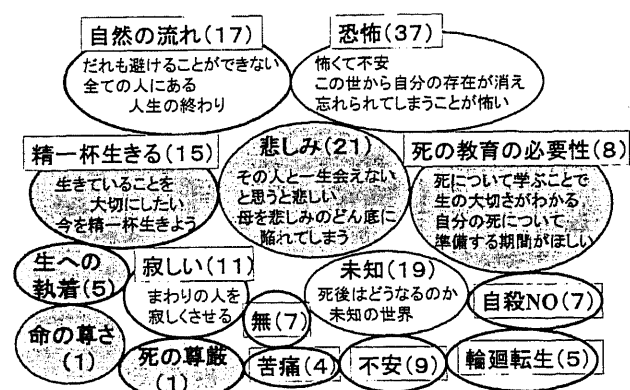


図 5-1 日本の看護学生の「死観」(KJ法)

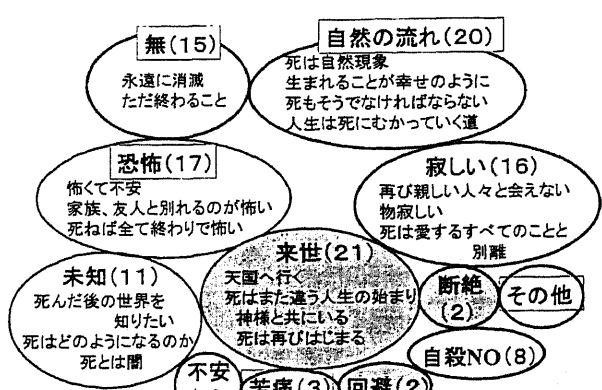


図 5-2 韓国の看護学生の「死観」(KJ法)

図5に示したのは「死について」の自由記述の結果を生きがいと同様にKJ法で分析した結果を簡素化したものである。日本の看護学生251名中178名の自由記述があった。死とは、「恐怖」37、「悲しみ」21、「未知」19、「寂しい」11、「精一杯生きる」15、「死の教育の必要性」8、「自殺NO」7などの項目に分類できた。韓国の看護学生は211名中129名

の自由記述があった。死とは、「来世」21、「自然の流れ」20、「恐怖」17、「無」15、「未知」11などの項目に分類できた。両国の共通の項目は「恐怖」「自然の流れ」「寂しい」「未知」「無」であり、異なる項目は、日本では「悲しみ」「死の教育の必要性」「精一杯生きる」「生への執着」が加わり、韓国では「来世」「断絶」が加わった。

4. 死の教育：死の教育について意義があると答えた学生は、日本では208名(82.5%)、韓国は158名(76.3%)であった( $p < 0.01$ ) (表7)。死について真剣に話し合ったことはありますかの質問に対して、あると答えた人は韓国42.3%日本49.8%で有意差はなかった(表8)。誰と真剣に話しましたかの質問に対して韓国では友人66.3%両親10.2%であり日本では友人37.5%両親33.6%であり、勧告の感が学生は友人としについて話し合うことが多かった(図4)学校の授業で死について学んだことはありますかの質問に対し、あると答えた人は、韓国72.5%、日本74.1%で有意差はなかった(表9)。学校でいつ頃死について学んだかの質問に対し韓国では74.5%の学生が大学に入ってからと答えているのに対して、日本では小学校38名(20.5%)中学校47名(25.4%)高校40名(21.6%)大学生51名(27.6%)であった( $p < 0.01$ ) (表10)。両国とも79.2%~73.8%の学生が、学校で死に関する授業を行うことは必要だと答え、学校の授業で死の教育をいつ行うのが良いと思いますかの問いに対して、日本では、小学校・中学校で行うべき184名(78.2%)に対し、韓国では小学校25名(13.0%)、中学校57(29.7%)高校54名(28.1%)、大学42名(21.9%)わからない17名(8.9%)と分かれており、82名(42.7%)の学生が小・中学校でと答えた。( $p < 0.001$ )。(表11)

表7 死について学んだり考えることは生きていく上で意義があると思いますか n=459

国名	意義がある 名 (%)	どちらともいえない 名 (%)	意義がない 名 (%)	p 値
韓国	158 (76.3)	33 (15.9)	16 (7.7)	.001
日本	208 (82.5)	42 (16.7)	2 (0.8)	

表8 死について真剣に話し合ったことはありますか n=459

国名	ある 名 (%)	ない 名 (%)	p 値
韓国	88 (42.3)	120 (57.7)	.066
日本	125 (49.8)	126 (50.2)	

表9 学校の授業において死について学んだことがありますか n=451

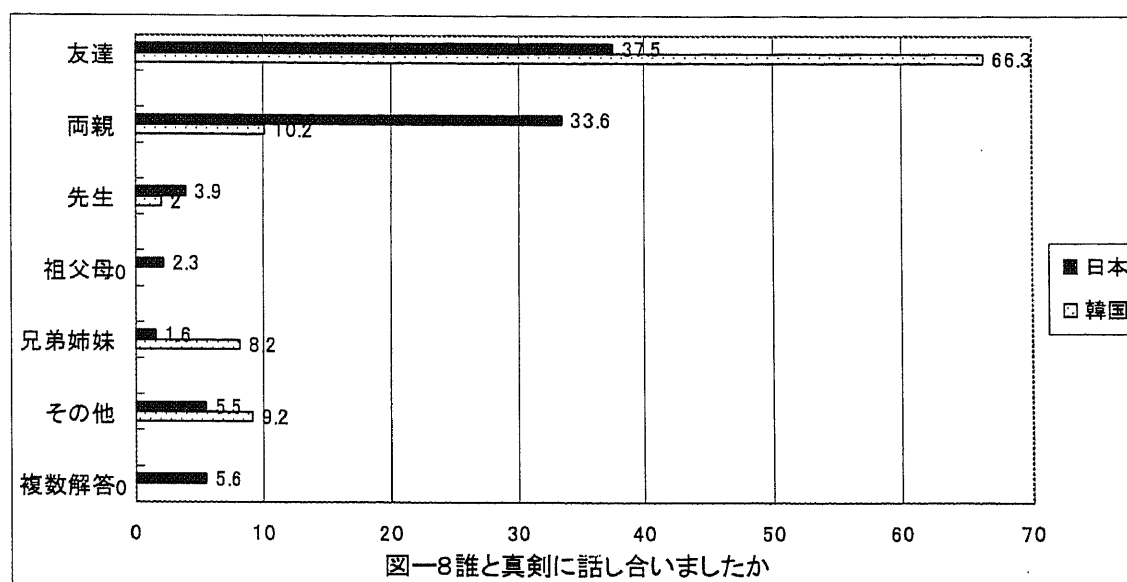
国名	ある 名 (%)	ない 名 (%)	p 値
韓国	148 (72.5)	56 (27.5)	.396
日本	183 (74.1)	64 (25.9)	

表 10 学校の授業でいつ死について学びましたか n=338

国名	小学生の頃 名 (%)	中学生の頃 名 (%)	高校生の頃 名 (%)	大学生になって 名 (%)	複数回答 名 (%)	p 値
韓国	6 (3.9)	16 (10.5)	16 (10.5)	114 (74.5)	1 (0.7)	.000
日本	38 (20.5)	47 (25.4)	40 (21.6)	51 (27.6)	9 (4.8)	

表 11 学校の授業で死の教育を行なうのが良いと思いますか

国名	小学校 名 (%)	中学校 名 (%)	高等学校 名 (%)	大学 名 (%)	わからない 名 (%)	p 値
韓国	25 (13.0)	57 (29.7)	54 (28.1)	42 (21.9)	17 (8.9)	.000
日本	83 (35.3)	101 (42.9)	28 (12.4)	⑧ (3.4)	28 (12.0)	



### 考 察

日本・韓国の自殺による死亡率は日本 23.3, 韓国 15.5 (人口 10 万対) であり、増加の傾向にある。特に日本においては若年層の自殺者が後を絶たず、死亡原因別統計によると第 1 位が事故死、第 2 位が自殺であり憂慮する事態に陥っている。そこで、若年者の生と死についての意識を、日本と韓国の看護大学生の意識調査により比較を試みた。

1) 死の意識：韓国では 8 割に近い学生が死にたいと思っただけであり、日本の看護学生は 6 割弱であった。韓国の学生のほうが死にたいと思っただけの学生が多く、小・中学校の頃が全体の 40% を占めていた。自殺について日本・韓国とも、人生からの逃避と答え、絶対してはならないと日本の学生のほうが多く答えていた。しかし、日本の学生は、「時と場合による」と自殺を肯定するとも考えられる意見があった。特定の宗教を持つと 5 割の学生が答えた韓国と宗教を持たない日本の学生の死についての意識の根底には宗教

が大きく左右することが伺えた。

2) 生きがい：両国における看護大学生共通の生きがいは「目標に向かって努力する」「家族・友人・愛」「生きていることへの実感」「したいことをする」「自己の存在感」であり、異なる項目は日本では、「趣味」「ペット」「良好な人間関係」「健康感」「親への恩返し」が加わり、韓国では「成就感」「自己実現」「信仰の成就」「自己成長」「幸福の追求」が加わった。日本では93%の学生が宗教を信じていないのに対し、韓国では5割以上の学生が特定の宗教をもち、7割近くの学生が、死を考えるうえで宗教が大きな役割を果たすと述べていることから、「幸福の追求」「成就感」「信仰の成就」が項目として加わったと考えられる。

3) 死についての両国の共通項目は「恐怖」「自然の流れ」「寂しい」「未知」「無」であり、異なる項目は、日本では「悲しみ」「死の教育の必要性」「精一杯生きる」「生への執着」が加わり、韓国では「来世」「断絶」が加わった。特定の宗教を持ち、霊魂を信じる韓国は来世を信じることも不思議ではなく日本と大きく違う原因であると考えられる。また日本では死の準備教育も進み、看護学生は死を考える機会も多いことから、死の教育の必要性を挙げたことも当然のように感じられる。また死は一生懸命生きた結果、死はいつか訪れるものであるから生を一生懸命生きたいといった考えがあった。

4) 死の教育：日本と韓国両国の看護学生は死について学んだことがあるが、時期に相違があった。日本では高校までに7割の学生が学んでいるのに対し、韓国では死の教育は大学に入学してから行われていた。学校での授業の必要性も変化はないが、実施時期に違いがあった。日本では小・中学校で行うべきとしたのに対し、韓国では小・中学校と捉えた学生が少なかった。死にたいと思った時は死の教育は行われていない実情が明らかになった。両国とも小学生の時期より死の教育をはじめることが望ましい。

## 結 論

本研究の目的は日本と韓国の看護大学生がどのような死生観をもっているかを明らかにすることであった。日本の看護大学生251名、韓国の看護大学生211名を対象に自記式調査を実施した。主な結果は以下の通りである。

1. 日本に比べ韓国の方が死にたいと思ったことのある学生が多く、小・中学校の頃が全体の4割を占めていた
2. 宗教を持たない日本と特定の宗教を持つ韓国の死生観の大きな違いは韓国の学生は来世観をもつことであった。
3. 死の教育については日本の学生の方が、小学校の頃より必要と考え、韓国の学生は大学に入ってからと考えていた。このことは、死にたいと思った時期には、死の教育は行われていない。
4. 両国とも小学校の時期より死の教育を始めることが望ましい。

最後に本調査にご協力いただきました皆様に感謝いたします。

なお、本研究は、第23回日本看護科学学会において発表しました。



### 引用・参考文献

- 1) 岡須美恵・道廣睦子他：死生観に関する教育の必要性についての一考察、インターナショナル nursing care research VOL 1、NO2、2002、9、85～89
- 2) 田路慧他：医療・看護・福祉事業従事者養成教育における生命倫理教育の研究報告書、岡山県立大学
- 3) 横浜市衛生研究所：死亡率・致死率（致命率）・死亡割合について、<http://www.eiken.city.yokohama.jp/infection-inf/deathrate1.htm>
- 4) SEOULNAVI.COM: 統計で見る韓国/ソウル（2）「統計でみる韓国の女性の暮らしパート1」  
<http://www.seoulnavi.com/home/home-20-2.html>
- 5) 川畑・藤田：「生命観・死生観」に関する認識調査報告（2）、第42回日本学校保健学会、1995、11（千葉）、p 365
- 6) 道廣睦子・岡須美恵他：日本における看護学生と保育学生の臓器移植への態度～生と死をみつめる教育の視点より～、インターナショナル nursing care research VOL 1、NO2、2002、9、65～74
- 7) 道廣睦子・橋本和子他：日本における健康な在宅高齢者の死生観、第8回日中看護学会誌、p156-159、2002